

ローマの信徒への手紙 1章 18節～23節 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。

プロテスタント教会の古典的な信仰問答書『ハイデルベルク信仰問答』は、第一部「人間の悲惨さについて」、第二部「人間の救いについて」、第三部「感謝について」の3部構成になっている。これは、ローマ書そのままの構成である。パウロはローマ書で、初めに人間の罪について、次に、その罪の赦しについて、最後に、赦された者の新しい生き方について語っている。この3部構成はキリスト教神学の基本と言えよう。

パウロはローマ教会へ挨拶し、まずキリストの福音を要約して述べた。ローマ書の本論は上記の御言葉から始まる。最初は、人間の罪の大きさの指摘からである。パウロはまず、「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます」と、人間の不信心と不義が真理の働きを妨げるので、神は天から怒りを現わされると言う。「不信心」は神が神であることを畏れない背信であり、「不義」は義なる神に対する背信である。その背信に対し、神は怒りを現わされる。神の怒りは「神の義」の啓示である。

続いてパウロは、人間は神について知り得ていることは明らかで、神がそれを示されている。世界が造られた時から、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、人間は神を知ることができるという。この記述が問題であろう。パウロはイエス・キリストにおいてのみ、神が啓示されているという福音理解であった。ナチズムに反対を表明した「バルメン宣言」の第1項は、「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一のみ言葉である」と宣言し、それを、「神のこの唯一のみ言葉のほかに、またそれと並んで、更に他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならないという誤った教えを、われわれは退ける」と解説している。神の言葉は他のもの（ヒトラー）ではなく、イエス・キリストにおいてのみ啓示されているというのが福音の基本である。パウロは、被造物・自然の中に神が啓示されていると言っている訳で、パウロらしからぬ言葉である。しかしパウロはここから、神を認めない者が偶像礼拝に陥っている罪を書いている。神により被造物は存在させられていながら、神を崇めず、感謝もしないのだから弁解の余地がない。彼らは、虚無の思いに沈み込み、心は鈍く、暗黒になっている。知恵があると吹聴しながら、実は愚かで、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた偶像と取り替えている。パウロは、神を拒否することは偶像への逃避であり、自分を失う罪であると、その罪を列挙していく。